

周作人における「趣味」の内実

鳥谷, まゆみ
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494653>

出版情報：比較社会文化研究. 21, pp. 55-64, 2007-03-10. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：



周作人における「趣味」の内実

トリ ャ マ ユ ミ
鳥 谷 まゆみ

はじめに

周作人（1885－1967）は中国紹興生まれの文学者である。日本軍が1937年から北京を占領した際、南下することなく北京にとどまり、傀儡政権の要職に就いたため、戦後「漢奸」（民族の裏切り者）として投獄された。そのため、現代中国においてもその研究は、未だタブーとされるところが少なくない。

周作人は1906年22歳の時に日本留学を果たし、それ以降、兄魯迅と共に約6年間の東京生活を体験し、日本文化に強い関心を示した上、それを積極的に受容している¹。この青年期の留学体験は、後の彼の文学創作活動や文体の選択、生活の実践に大きな影響を与えた。彼は自分が住んだ都市をいずれも「第二の故郷」と呼んだが、特に東京と北京について強い愛着を抱いていた²。帰国後も、日本の書籍や新聞を読み、日本人作家達が、北京の周邸「苦住庵」を訪れるなど、周作人と「日本」との関りは生涯に涉っている。

従来、周作人と日本文化に言及した論考はいくつか見られるが、特に日常生活を描いた作品に関して、詳細に検討を行ったものは管見の限りほとんど見られない。これは、

人々の注意が主として、中国新文学における彼の貢献、あるいは時局的な談論に向いているからであろう。しかし、彼の得意とする文学形式が「小品」の短編形式の散文であり、「日常生活」という非常に身近なものをテーマとしていることから、こうした点に注意を払う必要がある。実際に1917年からの北京生活開始以降、五四文学運動を経て、1924年頃から都市に取材した「小品文」を次々と生み出し、この形式を彼は晩年まで堅持し、使い続けた³。時代はくだって、1930年には上海で林語堂主編の小品文雑誌『論語』が発刊され、これが小品文運動への契機となり、「ユーモア小品文」として系統だった文体の一つとして結実をみることとなった。中国新文学において最も大きな発展を遂げたと言われる「散文」と、ほぼ同様の位置に存ずる文体と考えられる「小品文」は、裏を返せば、文体としてのその定義が曖昧模糊としており判然としないことを意味している⁴。

このように、文学史的視座に立てば、「日本研究店」としても知られる周作人の初期「小品文」への詳細な検討は、複雑に変遷する周作人思想の一端を抽出する上で有効である⁵。周作人の小品文（小品散文）について、錢理群や伊藤徳也⁶、郁達夫⁷、そして諸研究者が、彼の散文の芸術性、個

¹ 魯迅と共同で翻訳集『域外小説集』（東京神田印刷所、「第一冊」1909年3月出版）、『現代日本小説集』（会稽周氏兄弟訳、1923年7月出版）を出版するなど、当時の日本思潮や被圧迫民族を中心としたヨーロッパ諸国の文学作品をいち早く中国に紹介している。

² 周作人にとっての「東京」とは、総じて「日本」を意味していたことを強調しておく。彼は五四時期に、知識人階層にあった人々と同様に世界主義の立場をとるが、それは青年期の日本留学という実体験に依拠するところが大きいのは既に広く知られている。周作人は東京において、国家や都市という枠組みを越えて世事を見つめる眼差しを培い、1909年には日本人羽太信子と恋愛結婚をしている。具体的な彼の評言として、周作人「懐東京」（1936年9月『宇宙風』25期）に次のような一文がある、「我的東京的懷念差不多是对日本的一切觀察的基本」。自身を「日本研究店」（※一時閉店する時期もある）と称して、日本に関する言説を残すが、その多くが東京を中心としたものである。周作人が留学した明治末期、東京が日本の首都として、政治、文学、メディアの中心地であり、彼の生活した東京が「日本」を意味していたことは半ば当然なことであった。また、彼は約6年間の東京留学中、東京以外を一度も国内旅行することがなく、特に現文京区一帯を兄と共に散策することを日課としていたことが、彼の日記や随筆からわかる。

³ 錢理群や伊藤徳也は、周作人が1924年を境に、思想や人生哲学などを大きく転向させたことを指摘している。錢『周作人伝』北京十月文芸出版社、2001年。伊藤「小品文作家周作人の誕生と雨の日の心象風景」『東洋文化』77号、東京大学東洋文化研究所、1997年等参照。

⁴ 錢理群は『周作人論』（上海人民出版社、1991年）において、小品文について次のような説明をしている、「五四散文又称小品文、或小品散文、它的一个来源是英国的随筆。」（同、196頁）

⁵ 趙京華（『周作人と日本文化』一橋大学博士学位論文、1998年参照）は周作人の生涯の思想の変遷を大きく次の3つの時期に分けている。20年代：フレイザー（英、1854－1894）の人類学とH・エリスの性心理学受容、30年代：儒教回帰と柳田国男の民俗学への関心、40年代：原始儒教に対する意見の変化。周作人の思想は、時局の変遷からの影響の他に、個人の性分や実体験等も複雑に関係しているわけで、上記の如く年代順に判然と分類することには、まだ議論の余地があるだろう。

⁶ 注3参照。

⁷ 郁達夫『中国新文学体系・散文2集・導論』上海良友圖書公司出版、1935年。蔡元培等『中国新文学体系導論集』上海書店影印、1982年、201－222頁参照。

性、「閑話」等の趣味的要素を現すタームを用いて分析を試みている⁸。鳥谷は過去に「周作人与日本文化—以飲食文化為中心」(2005)⁹と題して、周作人の文化思想の構築過程(20年代中心)の視点から、東京と北京の食文化への彼の体験をもとにした記述を分析したことがあるが、それは充分ではなかった。そこで本稿では、周作人の特に小品文について細かに再度検討を加えることで拙論の補遺としたい。併せて、周作人の文学創作における思想の基軸を、先行研究、そして周作人自身もにたびたび使用し、彼の文体選択のキーワードと推測される「趣味(原文)」に置き、その内実を明らかにしたい。

1. 周作人の「趣味」

周作人は、現実社会である北京の日常の中で、日本の生活に思いを馳せながら、自分が理想とする生活を求めている。それは1924年に周作人が発表した広く知られる「生活之芸術」(1924)¹⁰に見ることができる。「生活之芸術」は、1924年11月17日発刊の週刊文藝雑誌『語絲』の第一面を飾った文章で、周作人がイギリス性心理学者ハヴェロック・エリス(以下H・エリス)に傾倒して、エリスの強い影響の下に書かれたものである。この観点からの先行研究は既に幾つか見られるので、ここでは特にそれらを取りあげないが¹¹、彼の「生活之芸術」には、五四文学革命運動後に、一定の境地に至ったことが窺える重要な箇所があるのでここで特に引いておく。

「生活之芸術只在禁欲と縦欲的調和」
(生活の芸術は、ただ禁欲と縦欲の調和にのみある)

「生活之芸術、其方法只在於微妙地混和取与捨二者而已」
(生活の芸術、その方法はただ取と捨の二者のみの微妙に混和することにある) (鳥谷訳)

後者の引用は、H・エリスの言葉を周作人がそのまま引いたものだが、これらの簡明な言葉からは、彼がエリスの言葉を全面的に受容していたことを表すのはもとより、日常生活を如何に芸術的に営むことに執着していたかが窺えよう。また、中国語の「調和」や「混和する」とは、訳出

した通り、「混じりあうこと」、つまり、融合を意味するが、周作人はこうした語彙を多用する習性があるようだ。

周作人のこうした傾向は、彼の深層心理を成す一種趣味的な側面を浮かび上がらせていると言えるのではないだろうか。彼と深い交流があり、たびたび書簡を交わしていた松枝茂夫は、前述の『語絲』を魯迅や孫伏園(1894—1960)と共に創刊する前後の周作人の小品文について、「俳文を思わせるような趣味豊かな優れた小品文を多く物し、閑適高雅な境地を見せた」と指摘している¹²。文中の「趣味」が、閑適や高雅の意味を含むことは容易に想像がつく。

では、松枝も指摘する「趣味」の内実を構成する他の側面とは如何なるものであったか。1935年に発表された周作人「笠翁与隋園」(1935)¹³では、周作人にとって重要なキーワードといえる「趣味」について次のように具体的な語彙を挙げて説明している箇所がある。

「我很看重趣味、以為這是美也是善、而沒趣味乃是一件大壞事。這所謂趣味里包含着好些東西、如雅、拙、樸、澁、重厚、清朗、通達、中庸、有別擇等、反是者都是沒趣味。」

(私は非常に趣味を重視する。これこそ美であり善でもある。また没趣味はひとつのたいへん大きな悪いことであると思う。この所謂趣味の中には、幾つかのよいものを含んでいて、上品で美しい(雅)、つたない(拙)、質素(樸)、好みや心がけの派手やかさがなくて趣味あること(澁)、清く朗らかなこと(清朗)、物事を明らかに心得ていること(通達)、中正の道、凡庸(中庸)、識別と選択(別擇)である等の如きであり、これに反するものはすべて没趣味である。) (鳥谷訳、下線)

周作人にとって、「趣味」こそが重要なのである。そして、彼の独自の意見とする上記のような趣味の定義から外れれば、「没趣味」であるとし、たいへん悪いことであるとまで言い切る。しかし、この箇所はあまりにも簡潔な評言であるため訳出しにくく、彼の深層心理であるはずの「趣味」の意味は抽象的で総括的感すらあり、判然としない。そこで、周作人の伝記的事実として、既に知られる彼の思想形成に深く関与した日本文化の記述を切り口として、「趣味」の側面について以下に考察していきたい¹⁴。

⁸ 銭理群「關於周作人散文藝術的斷想」『江海學刊』第3期、1988年。王向東「文体、材料、趣味、個性—以周作人為代表的中國現代小品文與日本寫生文比較觀」『魯迅研究月刊』第四期、1994年。吳曉東「論中國現代散文的「閑話」和「獨語」」北京大學修士學位論文、1991年等。

⁹ 鳥谷真由美「周作人与日本文化—以飲食文化為中心」『魯迅研究月刊』北京魯迅博物館大象出版社、2005年12月。

¹⁰ 周作人「生活之芸術」1924年11月17日『語絲』第1期。

¹¹ 小川利康「周作人とH・エリス—1920年代を中心に」早稲田大学大学院『文学研究科別冊』第15集、文学芸術学編、131—144頁、1989年。

¹² 松枝茂夫「周作人—伝記的素描」『中国文学月報』60号中国文学研究会、1940年。引用は『松枝茂夫文集第2巻』研文出版、1999年、26頁。下線は鳥谷。

¹³ 周作人「笠翁与隋園」1935年9月6日『大公報・文藝』第4期。引用は『苦竹雜記』岳麓書社出版、1987年、56—64頁。

¹⁴ 趙京華『尋探精神家園—周作人文化思想与審美追求』中国人民大学出版社、1989年参照。

1-2. 日本文化

周作人「喫茶」(1924)¹⁵には、日本文化の芸術的側面を端的に評言した次のような箇所がある。

「忙里偷閑、苦中作樂。〔中略〕在不完全的現世享樂一点美与和諧、在刹那間体会永久、是日本之「象徵的文化」里的一種代表藝術。」

（忙裏に閑を偷み、苦中樂を作す〔中略〕不完全な現世においてわずかの美と和諧とを享樂し、刹那の間に永久を身にしみて感じ得るのであり、これが、日本の「象徵的文化」中の一種の代表藝術である。）（鳥谷沢）

「忙裏に閑を偷み、苦中樂を作す」という、禪の境地を窺わせるかの如くの評言が言い得て妙である。こうした日本の「象徵的文化」の中に芸術一つを見出す周作人の感受性の深さは、彼の個性として眼を引く。

また、「苦中作樂」について、周作人研究者銭理群は、周作人「苦雨」(1924)¹⁶を例に挙げて、次のように指摘している。「(周作人は一鳥谷注) 雨ひとつに自分の主体的な感性を注ぎ、「喜」というロマン主義的思考で以って現実の平凡な生活中の「苦」を、「苦中作樂」という生命体験としての「喜」と捉えたとし、それは一種の貴族的な精神による評言である」¹⁷。この「貴族的」という評言は、周作人の初期作品の代表格に挙げられる「人的文学」(1918)¹⁸、「貴族的与平民的」(1922)¹⁹等に対応してのものであり、その具体的意味は正に「平民」と対峙的位置にある「貴族」を意味していよう。その上で、銭氏は『周作人論』(1991)においては、「(周作人の一鳥谷注)「趣味」とは一種の人生態度と審美的情趣の統一であり、人生価値の評定と審美的事物の追求の統一であり、そして、人としての風格と文章の風格の統一である。」²⁰と書いている。この分析と評言は、確かにそうであろうが、抽象的で性急な総括的議論のように

思われ、やや説得力に欠けるのではないだろうか。この議論には、日本文化に対する言及が無い。銭氏自身も、上記の一文の後で、日本文化の一つである俳文の境地への言及を試みているが、それは至極僅かで、表面的な記述に留まっている。周作人の日本文化の実体験、もしくはその記憶への言及は必要不可欠であろう。

岡倉天心(1862—1913)『茶の本』(1906)²¹は、拙論「周作人与日本文化」²²でも取り上げたが、茶道の心や儀式を描くことにより、日本文化を論じた書籍であり、前述の周作人「喫茶」の中でも同書へ言及した箇所がある²³。周作人の日記や蔵書目録によれば、彼は実際に同書を1924年11月27日に北京飯店で購入していて²⁴、1944年に方紀生が中国語訳を出版する際には、同書に序文を寄せており、周作人とは深い関わりがある書籍と言える。『茶の本』の中で、天心は茶をたてる行為と、その過程に「真の美」が必ず存在するとし、続けて次のように言う。

「(茶の宗匠は一鳥谷注)生花に接する正しい精神を教えてください。彼らは、人間は生来簡素を愛するものであると強調して、人情の美しさを示してくれた。実際、彼らの教えによって茶は国民の生活の中にはいったのである。」²⁵

茶が日本人の中に深く浸透していて、そのため、日本人は自然を愛で、簡素さを好む。周作人が日本の生活を体験して、そうした日常生活の簡素さを好んだことは、彼が晩年に書いた留学時代の回想文にも見える²⁶。簡素という語句一つで日本の生活や、日本人の気質、人情の全てを説明することはできないが、この簡素という言葉在先の「笠翁与隋園」に見た周作人の「趣味」の一端を表す評言として考えることは可能である。

さらに周作人における日本文化についての考察を深めた

¹⁵ 周作人「喫茶」1924年12月29日『語絲』第7期。『雨天的書』所収。

¹⁶ 周作人「苦雨—致孫伏園」1924年7月22日『晨报副鰲』。『雨天的書』所収。

¹⁷ 銭理群「二 凡人的現実之「苦」与生命体験中的超越之「喜」—読『苦雨』」『読周作人』天津古籍出版社、2001年、7—9頁参照。訳、傍点は鳥谷。

¹⁸ 周作人「人的文学」1918年12月15日『新青年』第5巻第6号。初め『点滴』に所収され、後に『芸術与生活』所収。

¹⁹ 周作人「貴族的与平民的」1922年2月19日『晨报副鰲』。『自己的園地』所収。

²⁰ 銭理群「周作人の散文芸術」『周作人論』上海人民出版社、1991年、207—208頁。原文は、「「趣味」は一種人生態度と審美情趣の統一、是人生価値評定と審美追求の統一、是為人的風格与作文の風格の統一。」

²¹ 岡倉覚三(岡倉天心)『Book of tea』Fox Daffield社(米)1906年。『茶の本』岩波書店、2003年8月参照。

²² 注11参照。

²³ 周作人「北京の茶食」と天心『茶の本』の一節の、まるで同様の境地とも受け取れる文章を参考までに挙げておく。周作人「茶を飲むには瓦屋紙窓の下にてあらまほしきもの、清泉のごとき緑茶を、素雅なる陶製の茶器を用いて、二三の人々と共に飲み、半日の閑を得なば、十年の塵夢に抵るべしである」(松枝茂夫訳)。天心「まあ、茶でも一口すすろうではないか。明るい午後の日ば竹林にはえ、泉水はうれしげな音をたて、松籟はわが茶釜に聞こえている。はかないことを夢に見て、美しい取りとめのないことをあれやこれやと考えようではないか」。

²⁴ 魯迅博物館蔵『周作人日記(影印本)』大象出版社、1996年参照。

²⁵ 岡倉覚三『茶の本』(前掲)85—86頁。

²⁶ 周作人「留學的回憶」1943年1月6日作。『留日同学会季刊』1943年初出。『葉堂雜文』河北：教育出版社、2002年、99—104頁参照。

い。日本の菓子、羊羹や草餅について「菓子は日本の菓子が形が良くて美しいし、又うまい。」と内田誠(1893-1955)が周作人のコメントを回想しているが²⁷、一体周作人の考える日本の菓子に見出した「日本文化」とは具体的にどのようなものであったのか。

周作人「北京的茶食」(1924)²⁸の冒頭に五十嵐力(1874-1947)の『我が書翰』(1916)²⁹に見える菓子についての一文が引いてある。五十嵐が言うには、良い菓子とは舌の上ではそれぞれの材料の区別もつかないほど、味が融合されていて美味しいとのことである。周作人はそれを、江戸250年の栄華の賜であると認識し、日本に「享樂的な風流余韻」が今日まで脈々と伝わっていることに関心を寄せる。日本の菓子は、自然で素朴な素材である豆や米に人の手が加わり、上品で美しく(「優雅な形と色」)作られていて、茶菓子としての資格を十全に満たしているから良いというわけである。つまり、日本の菓子が、優雅と素朴という、一見別ものを上手く融合して、両者を等しく併せ持っているから良いと周作人は考えている。そもそも、菓子は嗜好品である。それゆえ、彼が菓子を例に「享樂的な風流余韻」と表現している点から、周作人の風流に富んだ閑適な境地が見てとれよう。そして、また周作人は日常生活には、菓子のような「日用必需品」とは言えないものも必要であると主張する。彼は、嗜好品と日用必需品に代表されるような、対峙的事物が日本文化には同時に存在していることに感動を覚え、それを強調していると考えられる。

次に、周作人が日本で体験した生活やその彼の回想から、日本文化の側面を窺うことにする。当時多くの清末留学生が日本に来た際、寝台がないというので押入れに寝たり、畳にじかに座れず椅子を使うなど、なかなか生活に馴染めないでいる一方で、彼は「私たちの東京生活は完全に日本式だった」と、前述の「留学的回憶」(1943)の中で回想している。日本の部屋は通常畳が敷かれているだけの簡素なもので、小さな台を置けば食事もできるし、物を書くこともできる上に、布団を広げればすぐに休むことができる、こうしたたって簡単な家屋様式は中国には無いが、実に快適だったとも彼は回想している。彼の伴侶が日本人であったことも少なからず影響しているだろうが、周作人が

日本式の生活を好んでいたことは間違いない。

「留学的回憶」のなかにはまた、次のような興味を引く一文がある。「生活から体験してかからねば、日本のことは深くはわかるはずがない」。清末留学生の多くが、近代化を遂げた日本とその日本を介してヨーロッパの先進科学や文化に注意を払い、それを習得しようとするのに躍起になっていた中で³⁰、周作人は日本の日常的生活風景に興味を抱いていたのである。日本の明治維新に遅れて、中国も近代化を遂げつつある中、周作人は日本を体験したのちに北京での生活を始めている。その直後の1920年代の彼の文化観は、日本文化との出会いによる衝撃と興奮の余韻が多分に温存されていたことだろう。この点で、周作人の20年代の文化観の基軸は、彼の実体験に基づいた日本の記憶、及び日常生活にあったといえる。

2. 北京の菓子-文化批判

周作人の著作には、自身が住まう北京の文化批判とともれる言説が幾度かみられる。例えば、再び1. で見た「北京的茶食」(1924)³¹の中では、適当にあちこちの菓子屋のようなものに入ってみて少しずつ買って食べてみるが、これまで一度もおいしい菓子を買って当たることがない、と嘆きにも似た言葉をもらす。さらに、続けて次のように言う。

「北京竟是没有好的茶食、還是有而我們不知道呢？〔中略〕總覺得住在古老的京城里喫不到包含歷史的精鍊的或頹廢的點心是一個很大的缺陷。北京的朋友們、能夠告訴我兩三家做得上好点心的錚錚鋪麼？」

(一体全体北京には結局良い菓子がないのか？それとも私たちが知らないだけなのだろうか？〔中略〕いつも思うのだが、古い北京城内に住みながら歴史を有し精鍊された或いは頹廢的な菓子を食することが出来ないのは一つの非常に大きな欠陥である。北京の友人たちよ、私に二、三軒でも良い菓子を作ることができる店を教えてくださいませんか？)³² (鳥谷訳、下線)

²⁷ 内田誠「嘉湖細點」方紀生『周作人先生のこと』光風館、1944年、193頁。

²⁸ 周作人「北京的茶食」1924年3月18日『晨报副刊』巻五。『雨天的書』岳麓書社出版、1987年参照。

²⁹ 従来、五十嵐力『我が書翰』の書肆情報等の詳細は、確認されていなかった。しかし、今回筆者は同書を国立国会図書館のマイクロフィッシュで確認することが出来たので、以下にその詳細を記しておく。五十嵐力『我が書翰』至文堂書店、1916年出版。「序」に、「此の書は私がこの両三年来人に上げた手紙の古物であります。」とある。周作人が取り上げた五十嵐の菓子への言及部分は、その内容から、同書の191-201頁「文展と空也」であることが推測できる。

³⁰ さねとう けいしゅう『中国人日本留学史』(くろしお出版、1970年)によれば、1901年以降、清政府の日本留学生政策の強化により、日本留学中国人は激増した。魯迅が来日した1902年には総数600余名、1905年(日露戦争後の中国科举制度廃止年)、その総数は一気に8000名に達している。その後、1907年を境に留学生数は減少していった。

³¹ 注28参照。

³² 周作人『雨天的書』(前掲)46頁。

引用文は、表面上、日本体験をもとに北京の飲食文化について愚痴を言っているだけのようだが、筆者にはその背後に知識人周作人ならではの一種のアイロニーが認められるように思う。下線部の「精錬された」、「頹廢的」という語句は、その語彙からして菓子の説明には到底そぐわないのは一目瞭然であり、反語の名手である周作人の作為の跡が見える。また、ある食べ物について、文句や不満を言うことは至極日常的なことのようにつまえられるかもしれない。しかし、周作人が性食の二大欲求に強い関心を寄せていたことから³³、北京の菓子を「まずい」と批判するのが、日本への憧憬の念ゆえである、と単純に考えるのは早計過ぎるように思われる。実際に当時の北京の食とは、どのような様子であったのだろうか。

『北平旅行指南』³⁴は1935年に出された小説家の張恨水（1895－1967）が査定を施し序文を書いた北京のガイドブックである³⁵。これには現在でも有名な観光地である琉璃廠の酸梅湯、および今はない地名だが、肉市の全聚德——この店は現在までに残りたいへん有名な北京ダック店であるが——と言った著名な店の名前が連なる。さらに、随筆集『北京乎』（1992）³⁶からも、1919年から約30年間の北京の食品だけではなく様々な風景を窺い知ることができる。同書にある作家らの北京の飲食に関する記述については、筆者が別稿で触れたのでここでは特に挙げないことにする³⁷。このほか『魯迅日記』³⁸や、明清時代の北京に関する書籍、例えば『帝京景物略』³⁹、『燕京雜記』⁴⁰、『日下旧聞考』⁴¹、『中華竹枝詞集』に見える「草珠一串一竹枝一〇八首・商賈」⁴²には、「ワンタン」や「鶏麵」、「水餃子」など、文化古城と称された北京には古くから時代を越えて美味しい食品が豊富に存在していたことが記されている。その中でも、空腹を満たす食品——「日用必需品」ではなく、嗜好品の菓子を例にとって、周作人は意図的に北京の文化批

判をしていたことが確認できる。

3. 近代知識人としての眼差し

周作人「日本の人情美」（1925）⁴³は、先に見た「喫茶」（1924）を書いた翌年の1925年、日本が帝国主義への一途をたどる最中に発表された作品である。

「我們要覘日本、不要去端相他那襖襠雙刀的尊容、須得去看他在那里吃茶弄草花時的樣子纔能知道他的真面目、雖然軍裝時是一副野相。」

（私たちが日本を見るには、彼らの両刀差しのご尊顔をぞをしげしげと見るよりも、彼らが茶を飲んだり草花をいじっている様子を見るのに限る。軍装の時はいかにも野蛮げな表情の相手と雖も、真面目はこうしてやっと知ることができるものである。）（鳥谷訳、下線）

周作人は戦争勃発の脅威の局面の際に、先ず真の日本を知る必要があると、中国国内の読者に示唆している。これは、「日本研究店」と自称していた周作人ならではの思想態度の現れである。飲食や草花といった身近な日常の風景に注目しようとする姿勢は、中国近代知識人の中でも、特に周作人に際立ち、注目に値する。

周作人の思想態度をさらに具体的に表明した「日本與中国」⁴⁴が、同年10月3日に書かれている。このエッセイは、近代知識人としての彼が見た日本と中国の「文化」を考える上で、非常に重要であると考えられるため、やや長いがその一部を引用しておく。

「中国在他独特的地位上特别有了解日本的必要與可能、但事实上却並不然、人家都輕蔑日本文化、以為古代是

³³ 周作人は『礼記』「飲食男女、人之大欲存焉」（飲食男女、人の大欲ここに存す）を、1907年に初めて引用し、以降長年にわたってたびたび自分の作品の中で引用を繰り返している。

³⁴ 馬正岸編、張恨水査定『北平旅行指南』経済新聞社、1935年。『老北京旅行指南』再植字版（重印本）燕山出版社、1997年参照。同書には「平民食品」の項目があり、「平民食品打油詩（附図）」と題して様々な食品についての打油詩が載せられている。未だ体系的なガイドブックがなかった2、30年代の北京の情景を知る上で、同書は資料的価値があるといえる。

³⁵ 20年代には、既に何人もの日本人作家が北京を訪れており、芥川龍之介「馬の脚」（初出『新潮』1925年1、2月号）、「貝殻」（『文芸春秋』1927年1月号）、南部修太郎「阿片の味」（『文藝市場』1926年6月号）など。日本人作家の描写から、当時の北京の風景を窺い知ることができるものも少なくない。

³⁶ 姜徳明編『北京乎』北京三聯書店、1992年。1919年から1949年の北京情景を描写し、計74名にも及ぶ作家の121篇所収した随筆集。

³⁷ 各作家の具体的描写については、拙稿「周作人と日本文化—以飲食文化為中心」（前掲）注釈9参照。

³⁸ 蟹（1915年9月10日）・張協和の栗（1913年9月18日）・生白菜、山芋（1912年12月19日／1913年4月30日）等。以上鄧雲郷『魯迅与北京風土』文史史料出版社、1982年参照。

³⁹ 〔明〕劉侗、于奕正『帝京景物略』上海古籍出版社、2001年参照。

⁴⁰ 〔清〕周光培編『燕京雜記—清代筆記小説四十八』河北教育出版社、1996年参照。

⁴¹ 〔清〕于敏中編纂『日下旧聞考』北京古籍出版社、1981年参照。

⁴² 〔清〕得碩亭「草珠一串一竹枝一〇八首・商賈」（1817年）雷夢水、潘超、孫忠銓、鐘山編『中華竹枝詞集』北京古籍出版社、1997年、145頁参照。

⁴³ 周作人「日本の人情美」1925年1月『語絲』第11期。

⁴⁴ 周作人「日本與中国」1925年10月10日『京報・副刊』第394期。引用は、『談虎集』上海書社影印出版社、1987年、495頁。

模倣中国、現代は模倣西洋、不值得一看板。日本古今の文化誠然是取材於中国與西洋、却經過一番調劑、成為他自己的東西、正如羅馬文明之出於希臘而自成一家、所以我們盡可以說日本自有他的文明、在藝術與生活方面最為顯著、雖然沒有什麼哲學思想。」

(中国にはその独特の地位において特に日本を理解する必要と可能性とがある。しかし事実はかえってそうではなく、人は皆日本文化を軽蔑し、古代は中国を模倣し、現代は西洋を模倣しているに過ぎず、一見の値打ちもないくらいに思っている。なるほど日本古今の文化が、中国と西洋に取材しているのは本当であるが、一通りの調整を経て、それを日本が自分のものとしたのは、まさにローマ文明がギリシャ文明から出でて、自ら一家を成したが如くである。したがって何の哲学思想もないが日本に日本固有の文明があると言っても差し支えはなく、それは芸術と生活の方面において最も顕著である。) (鳥谷訳、下線)

日本文化が引用の下線部に見えるように「中国と西洋に取材しているのは本当であるが、一通りの調整を経て、それを日本は自分のものとした」のに対し、彼の「現実」社会であり、盲目的に近代化に走る北京の現実からは、西洋文化との融合の上で独自の文化を作り上げているようには感じられない。その上、日本は中国と同じ東アジアの国でありながら、「芸術と生活の面に顕著」な独自の文明を有していると周作人は認識している。その体現ともいえる北京の文化を目の当たりにして、半ばやりきれず、もどかしさを感じる周作人の姿を上引用文から見てとれるのではないだろうか。

今述べた二点をまとめると、現実社会である首都北京は、周作人にとって、近代中国そのものであることに他ならない。周作人にとって、中国文化は、古来より日本に模倣されておきながら、彼の「趣味」に欠く文化のように感じられてならなかったのだろう。近代知識人として、自国の文化に期待するからこそ、こうした「現実」にもどかしさや切なさを感じていたのだ。こうして、例えば「北京の菓子がまずい」などと北京の文化批判を行ったということが考えられるだろう。

ここで、このような20年代の周作人の文化観は、30年代にも一部引き継がれていることを指摘しておきたい。1935年から1937年にかけて書いた「日本管窺」四篇(1935～1937)⁴⁵からは、20年代の彼自身の言葉を多く引用し、肯定している箇所を多く見ることができる⁴⁶。周作人が20年代に知識人としての姿勢を持ちながら、日本憧憬と「現実」社会である北京と向かい合い、文化批判を行っていたことを窺うことができる。

例えば「日本管窺之二―日本の衣食住」(1935)をここで確認しておく。この文章は、中国の清末外交官黄遵憲(1848—1905)の詩集『日本雜事詩』(1885)の日本家屋や生活に関する部分を大幅に引用して書かれたもので、日本のふすま、床の間、蚊帳、座蒲団等について細かい描写がある。周作人は、「こういう日本式の家屋が私は好きだ。〔中略〕あの部屋の便利で格別に簡単な生活に向いているところだ」と、説明する。これは、前述の彼の日本留学期の回想文と一致する感想である。

「便利で格別に簡単な生活」という、周作人の個性である趣味的な感受性が日本文化に集約されているのであり、裏を返せば、周作人の「趣味」の側面の一部は確実に日本文化の影響により形成されているのだと言える。こうした日本文化の影響を受け、30年代には、北京といった都市の枠からさらに越えた中国国家への、具体的な伝統文化批判に言及が及び、宦官や纏足、八股文、阿片を「中国の汚れ」と辛辣に批判をした⁴⁷。そして、さらに次のように語る。

「我固深欽日本之善於別擇、一面却亦仍夢想中国能於将来蕩滌此諸染汚」

(私は日本が識別と選択に長じていることに元来深く感服しているが、一方では中国が近い将来これらもろもろの汚れを一掃できることを夢想するのである)

(鳥谷訳)

このように「日本管窺」は、30年代の作品とはいえ、20年代の彼の文化観と通じるところが確認できる⁴⁸。周作人の記述から、彼の一環した中国文化に対する強い「期待」を感じることができ、同時に、彼の中国近代知識人としての「自覚」を認めることができよう。

⁴⁵ 周作人「日本管窺之一」1935年5月13日『国聞週報』12巻第18期、「日本管窺之二」1935年6月24日『国聞週報』12巻第24期、「日本管窺之三」1936年1月1日『国聞週報』13巻第1期、「日本管窺之四」1937年6月16日『国聞週報』14巻第25期。以上、鐘叔河編『周作人文類編・日本管窺7巻』(湖南：文芸出版社、1998年)参照。

⁴⁶ 本文中で前述したが、周作人の文化観や思想は時局やそれぞれの時代の文学思潮と共にめまぐるしく変遷しており、特に中国30年代は、1931年の満州事変に始まり、1937年の盧溝橋事変といった日本軍による侵略戦争が長く続いた暗黒の時代であった。20年代と30年代では、周作人の中国文化に対する期待や、日本文化への言及は当然違ってくるところがある。

⁴⁷ 周作人「日本管窺之二」『苦竹雜記』(前掲)156—165頁参照。

⁴⁸ ただし、30年代の周作人の文化に関する記述は、歴史的状況の影響を受けて書かれているため、松枝が言うような20年代の俳文を思わせるような趣味的な情趣は影を潜めている。

4. 小品文—周作人の選択—

周作人は1921年6月8日、『晨报副鰲』に子嚴というペンネームで、「美文」⁴⁹と題した文章を発表した。「美文」は、新文化運動で華々しく飛躍した中国近代文学の雰囲気全体が、既に色あせ始めた時期に書かれたものである。一方で、彼は特にイギリスのessay（散文）の影響の下、美文の概念を持つに至った。美文であるための条件として、次のような具体的な評言をしている箇所がある：「すべての文学作品は一樣で、ただ真実簡明であれば良い」⁵⁰、その上で、文章には抒情と叙事を含まなければならないとする。後の30年代、1932年に輔仁大学で講演した筆記を整理して『中国新文学の源流』（1932）を刊行するが、内容の凡そは、「中国文学史を即興的な「言志」と教条的な「載道」との対蹠的傾向の繰返しとして描きだす…（以下注釈51参照）」（木山・1996）⁵¹とある。周作人の「美文」はこの文学史発展・循環論の出発の起点とも言えるべき文章なのである⁵²。すぐ2年後の1923年に書いた「地方與文藝」（1923）⁵³には、新文学の文藝上に見られる欠点について論及した次のような箇所がある：

「這幾年来中国新興文藝漸見發達、各種創作也都有相當的成績、但我們覺得還有一點不足。為什麼呢？這便因為太執著抽象化了、普遍的一個要求、努力去寫出預定的概念、自己却没有真實地表現的個性、其結果當然是個單調。」

（この数年来、中国振興文藝での発達が次第に見られるようになり、それぞれの創作は皆相当の成績がある。しかし、われわれはなお一点の不足を感じる。なぜか？それは抽象化することや普遍的な一つの要求に執着し、また、既定の概念を描き出すことに熱心なあまり、却って自分の真実から表現された個性を持たない。その結果は、無論一つの単調なものになってしまうのだ。）（鳥谷訳、傍点）

引用の文章からは、彼が比較的早い段階から、新文学の発達を認めつつも、そのあり方そのものに疑念を抱いていた事実を確認することができる。そして、文章表現の中には、「真実から表現された個性」が必ず必要であることを主張している。

1926年の「藝術與生活」序（1926）には、武者小路実篤が理想社会創設を目指して創立した「新しき村」（1918～、所在地宮崎県）への言及から、人道主義の文学について論及している。周作人によれば、新しき村の住人は、「満足自己の趣味」に過ぎない生活を送っているという。彼は、それを文学上に置き換えて、その「満足自己の趣味」に意味が有り、その上で生活と芸術の形式や内容を持ち合わせているから、それ自体が成立していると認識している⁵⁴。この自序の中には、ほかにも次のような箇所がある。

「一九二四年以後所寫的三篇與以前的論文便略有不同、照我自己想起來、即夢想家與伝道者の気味漸漸地有點淡薄下去了。」⁵⁵。

（1924年以後に書いた三篇は、以前書いた文章とは幾分同じではない。私自身の考えに照らせば、即ち夢想家と伝道者の気風が次第にいささかぼんやりしてきている。）（鳥谷訳、傍点）

引用文の「夢想家」と「伝道者」とは、五四新文学運動の代表的旗手の一人であった知識人ならではの周作人の姿を現していることは言うまでもない。そして、確かに1924年前後に至っては、「人的文学」のような評論は見当たらない。

1928年の『燕知草』跋（1928）で、周作人は抒情的散文としての小品文を、「不専説理叙事而以抒情分子為主的」⁵⁶（理論や叙事ばかりを問題にするのではなくて、むしろ、抒情的要素を以って主とする）（鳥谷訳）と説明する。さらに、1930年雑誌『駱駝草』に発表した「昇齋隨筆「氷雪小品選」序」（1930）では、小品文について次のような評言をしている箇所がある。

⁴⁹ 周作人「美文」『晨报副鰲』1921年6月8日。『談虎集』所収。

⁵⁰ 鳥谷訳。原文は、「同一切文学作品一樣、只是真実簡明便好」。注44初出。引用は、周作人『談虎集』上海書店影印出版、1987年42頁。

⁵¹ 丸山昇・伊藤虎丸・新村徹編『中国現代文学事典』東京堂出版、1996年。引用は108頁、木山英雄執筆箇所。引用の省略部分は次の通り。「…ことにより、新文学の個性主義を清代文学の政治的道德權威主義への反動として、明末公安、竟陵派の延長に歴史づけ、さらに新左翼文学のイデオロギー主義に「載道」的傾向への新たな反動を展望する。」

⁵² 周作人講演、鄧恭三記録『中国新文学の源流』北平人文書局、1932年。

⁵³ 周作人「地方與文藝」「為杭州之江日報十周年」を記念して、1923年3月22日に作った。引用は、周作人『談龍集』上海書店影印出版、1987年11-16頁。

⁵⁴ 周作人は同村に強い関心を示していた。1919年には北京から同村を訪問し、帰郷後には、新しき村北京支部を自宅に開設した。しかし、この時期に至っては、周作人の新しき村への興味は既に消え去っていることを補足しておく。

⁵⁵ 周作人「藝術與生活・自序」『語絲』第93期、1926年8月22日初出。引用は、河北教育出版社、2002年、1頁。似通った指摘は、舒芜『周作人の是非功過』遼寧教育出版社、2000年、43-44頁にもれる。

⁵⁶ 周作人「燕知草・跋」1928年11月2日作、『永日集』初出。引用は、岳麓書社、1988年、77頁。

「小品文則在個人的文學之尖端、是言志的散文、純集合
叙事説理抒情的分子、都浸在自己的性情理」⁵⁷

(小品文はすなわちまた個人文学の尖端に在す。言志の
散文であり、それは叙事や道理、抒情との集合であり、
すべてが自己の天性や性質に滲みこんでいる)

(鳥谷訳)

以上のような一連の引用文から、20年代に彼が小品文について一定の規定を構築していく過程がわかる。こうして、前述した30年代に周作人が改めて提唱した「言志」と「載道」等をはじめとした文学の概念を語るようになる。それは、1935年の『中国新文学大系』に彼が序文を寄せた同書の『散文一集・導論』(1935)に至っても、言志＝載自己的道という模式が見られ、20年代からの流れを汲んだ論及を確認することができる⁵⁸。

ところで、日本文化から多大な影響を受け⁵⁹、「貴族的な精神」を堅持しながら小品文を描いた彼独自の境地であり、個性である周作人の「趣味」を当時多数いたと推測される文学雑誌の愛読者らは、それを理解して、共感することができたのだろうか。周作人小品文と当時のメディア・読者と作者の関係についても、検討する必要があると考えられるが、この点については稿を改めて述べたい。

おわりに

周作人の「趣味」の概念は、大きく、日本と中国の二つの要素と両者の融合から成り立っている。その概念の切り口として、諸氏研究者の評論を参考にしつつ、本稿では、彼の生活の実践、及び時系列的な文章表現を確認することにより、次の二点の周作人における「趣味」の内実を抽出することができた。生活の実践の側面では、先の1.で確認した「生活之芸術」にある「生活の芸術は、ただ禁欲と縦欲の調和にのみある」という評言から、如何に芸術的な生活を実践することに励もうとする彼の姿を窺うことができ、こうした姿勢が彼の趣味の内実の一つであると認めることができよう。この側面が、主に日本文化からの影響を受けていたことも忘れてはならない。次に、文章表現の側面では、日本や中国、イギリス等の文化を題材にしながら、美文、つまり良い文章であるための条件を、具体的に語る

ことに力を注ぐ。文章表現に関する評言は、4.の幾つかの引用文からも確認できるように、徐々に進化を遂げていったが、これは、多分に中国近代知識人としての自覚や使命感が作用していたことは言うまでも無い⁶⁰。それゆえ、冷静に現実社会を眺めては、文化批判をしたのである。

なぜ周作人が「小品文」を選択して、それを描き続けたか。それは、至極自然な選択であったと考えられる。なぜなら、先にも引用したが、「小品文はすなわちまた個人文学の尖端に在す。言志の散文であり、それは叙事や道理、抒情との集合であり、すべてが自己の天性や性質に滲みこんでいる」からである。つまり、周作人の評言から、「小品文」が彼の「趣味」の内実の表現方法として、理に適った文体であったと言えるのである。このようにして、周作人は創作活動を続けるなかで、20年代半ばには、近代における「小品文」を確立し⁶¹、小品散文の大家として名を成すこととなった。

* 訳文は、特に断りがない場合は拙訳によるものである。

翻訳及び訳文引用に参照した文献は、次の通り。

木山英雄訳『日本談義集』平凡社、2002年。

松枝茂夫訳『周作人随筆集』改造社、1938年。

松枝茂夫訳『周作人随筆』富山房、1996年

参考文献等

I 中国語

[明] 刘侗、于奕正『帝京景物略』上海：古籍出版社、2001年。

[清] 于敏中等編『日下旧聞考』北京：古籍出版社、1981年。

鄧雲鄉『鲁迅与北京風土』北京文史資料出版社、1982年。

『文化古城旧事』北京：中華書局、1995年。

姜德明編『北京乎』北京：三聯書店出版、1992年。

雷夢水、潘超、孫忠銓、鐘山編『中華竹枝詞』北京：古籍出版社、1997年。

鲁迅博物館藏『周作人日記』上中下、大象出版社、1996年。

『鲁迅全集』全16卷、北京：人民文学出版社、1981年。

馬芷庫著、張恨水审定『老北京旅行指南』北京燕山出版社、1997年。

『北平旅行指南』重排本。

王燭焜編『北京史地風物書錄』北京出版社、1985年。

張菊香、張鉄榮編『周作人年譜』天津：人民出版社、2000年。

鐘叔河編『周作人文類編・日本管窺・7卷』湖南：文芸出版社、1998年。

蔡元培等『中国新文学大系導論集』上海書店影印、1982年。

⁵⁷ 周作人「寒齋隨筆「冰雪小品選」序」1930年9月21日作。『駱駝草』第21期、1930年9月29日初出。

⁵⁸ 周作人『中国新文学体系・散文一集・導論』(前掲)。蔡元培等『中国新文学体系導論集』(前掲)参照。

⁵⁹ 木山氏は、周作人と日本文化の関係を次のように評言している、「中国の文学者で、周作人ほど日本と日本文化に深くかかわった人物は、他に見当たらない。」「日本談義集」東洋文庫、平凡社、2002年、375頁。

⁶⁰ 郁達夫『中国新文学大系・散文二集・導論』(前掲)参照。

⁶¹ 中国明末に既存した小品文と周作人との関連については、筆者は既に述べたことがあるのでここでは割愛する。拙稿「周作人における「都会詩人」——張岱『陶庵夢憶』を中心に——」『九州中国学会報』第44巻、2005年を参照されたい。

研究資料、著作：

- 陳平原 『文学史の形成与建構』 広西教育出版社、1999年。
『中国散文小説史』 上海：人民出版社、2004年。
錢理群 『周作人論』 上海：人民出版社、1991年。
『周作人伝』 北京十月文芸出版社、1990年。
舒蕪 『周作人のは非功過』 遼寧教育出版社、2000年。
張菊香、張鉄榮編『周作人研究資料』 天津：人民出版社、1986年。
趙園 『北京：城与人』 北京大学出版社、2002年。

研究論文：

- 錢理群 「關於周作人散文藝術的斷想」『江海學刊』第3期、1988年。
王向東 「文体、材料、趣味、個性－以周作人為代表的中國現代小品文与日本写生文比較觀」『魯迅研究月刊』第4期、1994年。
吳曉東 「論中國現代散文的「閑話」和「独語」」 北京大学修士學位論文、1991年。

II 日本語

- 岡倉天心 『茶の本』 岩波文庫、村岡博訳、岩波書店、2003年。
羅信耀 『北京風俗大全』 藤井省三訳、平凡社、1988年。

研究資料、著作：

- 鄧雲鄉 『北京の風物』 東方書店、1986年。
劉岸偉 『東洋人の悲哀』 河出書房新社、1991年。
木山英雄 『北京苦住庵記－日中戦争時代の周作人』 筑摩書房、1978年。
実藤恵秀 『中国人留学日本史』 くろしお出版、1970年。
于耀明 『周作人と日本現代文学』 翰林書房、2001年。
中野美代子 『悪魔のいない文学』 朝日選書、1998年。
松枝茂夫 『中国文学のたのしみ』 岩波書店、1998年。
丸山昇、小谷一郎、佐治俊彦編 『転形期における中国の知識人』 汲古書院、1999年。
吳紅華 『周作人と江戸庶民文芸』 創土社、2005年。

研究論文：

- 小川利康 「周作人とH・エリス－1920年代を中心に」 早稲田大学大学院『文学研究科別冊』第15集、文学芸術学編、1989年。
伊藤徳也 「芸術の本義－周作人「生活之芸術」の構造」『転形期における中国の知識人』 汲古書院、1999年。
趙京華 「周作人と日本文化」 一橋大学博士学位論文、1998年。

Zhou Zuo-ren's View: The Pursuit of Daily Life and Its Reality.

Mayumi TORIYA

Zhou Zuo-ren (1885-1967) is a litterateur - Shao Xing - born in China, who was deeply connected to Japan. He is known as “the department store of Japanism” and started to write “familiar essays” from the mid-1920s. In fact, his “familiar essays” fuelled the popularity of the so-called “humorous familiar essays”. It would, therefore require a study not only in terms of the writer himself, but also from the viewpoint of the “familiar essays”.

Qian Li-qun, Noriya Ito, Yu Da-fu and other writers have attempted analysis of Zhou Zuo-ren's “familiar essays”, with reference to terms which represent his orientation of pursuit, e.g. the artistry of his prose, character, “idle talk”, and so on. In my previous article *Zhou Zuo-ren and Japanese Culture*, “2005.12 Lu Xun Research Monthly” (『鲁迅研究月刊』北京鲁迅博物館大象出版社, 2005.12), I analyzed some his 1920s descriptions. These descriptions are rooted in his experiences of the food culture of Tokyo and Beijing, and I analyzed them from the perspective of his cultural idea formation. However, I feel that there is room for further analysis. Thus, reconsidering Zhou Zuo-ren's “familiar essays” more precisely, I have positioned this article as a supplementary discussion of the previous one. At the same time, I consider his cornerstone of thought as the “pursuit of daily life”. This “pursuit of daily life” is a term that is used in some of his previous works. And it is often used not only in his works but also by others who study them, and would be considered as a key description of his style.